

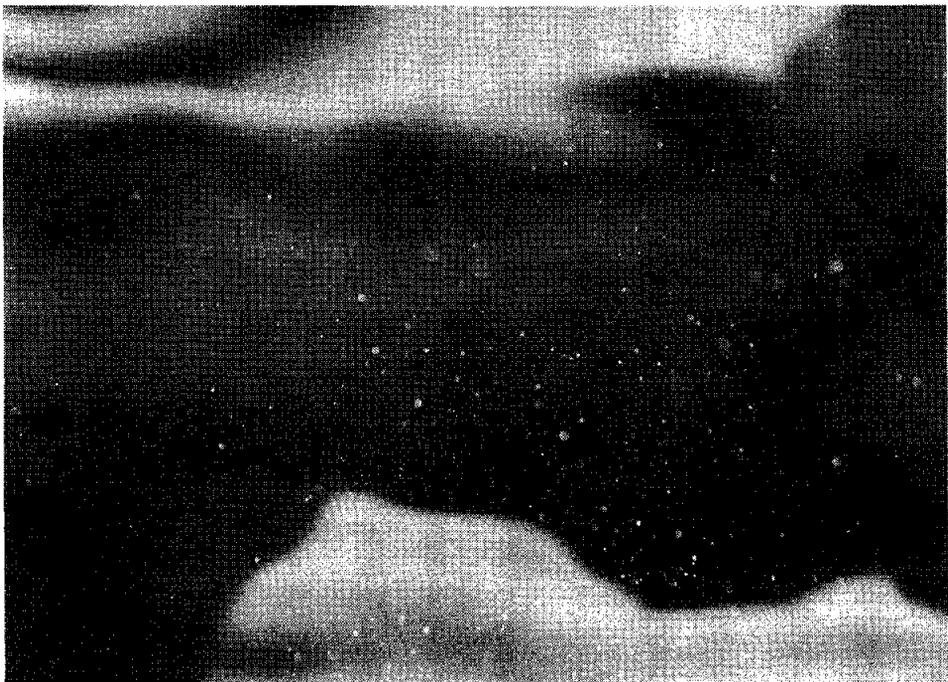
NCS HOKKAIDO

Nature Conservation
Society of Hokkaido

1999年 1月 NO.105

..... CONTENTS

チョットひとこと.....大久保フヨ.....	2	佐藤 謙のスイスだより.....	8
インタビュー.....マーク・ポー.....	3	連載・獣医さんのお話シリーズ(2).....	10
自然保護学校に参加して.....	5	ナキウサギ裁判第11回公判.....	10
第5回夏休み 自然観察記録コンクール入賞者.....	5	活動日誌・お知らせ.....	11
北海道・各地のニュース.....	6	要望書など.....	11
		お知らせコーナー.....	12



ダイヤモンドダストの輝き 撮影・大館 和広

チョット*ひとこと

これから自分流にいきよう

昨年を振りかえってみると、わが寅年と仕事も最後の一年ということで、知らず知らずのうちに自分よがりの思いが強かったのではないかと思います。そのような思いをいましめるかのような肺がんでした。病気らしい病気もせず元気なで過し、いい気になっている私に神さまがちよっとおきゆうをすえたのです。病気をしないのがあたりまえ、健康なのがあたりまえというおごった思いをいましめられたのです。病気になってつくづく健康であることがいかに大切であるかということ再認識しました。それも神さまがなされたことと考えたら、「御心のままに」という思いで、病気に対しての悩みも、恐れも、痛みもありませんでした。ただひとつ気になったことは猫の食事のことでした。でも幸いに近くに住む友人が面倒をみてくれることになり安心して入院できました。今は、私より先に猫が天国に召されることを願っています。



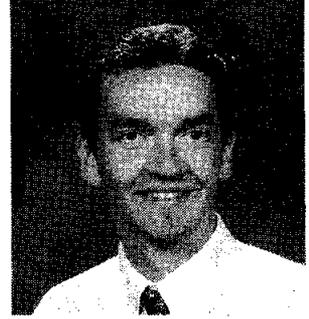
4月より私もいよいよ年金生活者になります。定まった時間に仕事に行くこともなく、自分のやりたいことができるということについては、とても楽しみでもあり、ちょっぴり不安でもあります。でも私には猫がいる。自然があり、自然はわが師であり、わが友だちと考えたらすばらしいのではないかとひとりほそ笑んでいる。今年は是非わが“西の里原始林”に咲く花で、まだ未撮影の花を写真に撮りたいと思っています。そして、一人でも二人でもいいから子どもたちに自然のすばらしいことを知ってもらえたらいいなと思っています。私は文明の利器にさからって一切使用しません、できません。職場でも何もできないのは私ぐらいです。車は自転車、ワープロ・パソコン等一切手にふれたことなし。でも楽しく生きています。自転車に乗っているから大谷地に行く途中の林の中のサイクリングロードでキタキツネにあえ、お話もできるのです。緑色に輝くアオカナブンも見つけられるのです。私は好奇心の固まりだから、知らない事を知った時の感動、写真ではみても実際にみたことのない野の花に出会った時の感動、すばらしい出会いはまだまだたくさんあります。林の中は友だちがいっぱいなのです。花に話しかけ、小鳥の歌をほめて一緒に歌ったり、時にはスズメバチとも話します。こんな私をみたら気がふれているかなと思うかもね。実際に山で会った人が私の顔を見て、頭をかき上げていきます。「確か誰かと話していたのに…」と思って。肩をはらず、自分流に楽しく生きたいものです。肺がんで入院して多くの人々の親切を受けました。退院後も。感謝、感謝、感謝です。病気になって今まで以上に、生きとし生けるものに愛しさを感じました。今まで以上に人にも優しくできるかしら……………。

(理事・北広島市在住)

お
お
大
久
保
フ
ヨ

マーク・ポー (Mark Poe) さん

北大法学部在籍・フルブライト交換留学生



アメリカにおける環境教育

アメリカ合衆国で自然環境への関心が高まったのは、ここ20年-30年のことです。環境保護運動の高まりは、小学校から大学まで、とくにアメリカ全土の学校において顕著です。最近では、ほとんどの公立学校の科目に環境教育が取り入れられており、ほぼすべての大学に、各種の環境専攻科目があります。アメリカ人は、小学校のころから環境問題について学ぶので、自然環境の保護に関心をもつようになるのだと思います。

私の場合は、世界中の絶滅のおそれのある生物と、それが人間の活動によってどのように脅かされてきたのかを学んだ小学校の授業を憶えています。とくに私は、クラスでシアトルの水族館へフィールド調査にいき、クジラがこれまでどのようにして撲滅され、それを憂慮する人達がどのようにしてクジラの絶滅を阻止できるのかを聞いたときのことを憶えています。宿題のひとつが、国会議員に、イルカ、ウミガメ、その他の海洋ほ乳動物の保護を求める手紙を書くことでした。また、高校では、すべての生徒が「環境教育」という科目を選択することができ、そこで、湿地、熱帯雨林、絶滅危惧種に対する脅威について学びました。その科目は、いろいろなフィールド調査にいたり、若者に関心のある話題について議論するので、生徒の間で大変人気がありました。

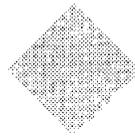
アメリカで自然保護が盛んな理由のひとつ

は、公立学校における環境教育が、人間環境保護より自然環境保護に力をいれていること

だと思います。子供たちは、廃棄物処理、リサイクル、化学物質汚染などの学習よりも、動物、密林、野生地帯などの学習により高い興味を示します。そして、生徒が一度環境全般に興味をもつと、自然環境と人間環境の両方の重要性を教えることはそう難しいことではありません。

すでに述べたように、アメリカ合衆国のほぼすべての大学に、環境専攻科目があります。私が入学したユタ州立大学では、環境保護に関する8つ専攻科目があり、600人の学生が在籍しています。専攻科目には、草地管理や流域科学のように特殊なものから、魚類野生生物管理、環境学のような一般的なものまであります。大部分の学生は環境保護を真剣に考えており、多数がボランティア事業の達成のための大学のクラブの会員です。私は、地球資源クラブとって、歩道作り、エルクの冬の給餌、柳の植樹による堤防の補強などの野外事業を月毎に実施するクラブの会員でした。

環境教育が、日本よりアメリカで大きく広がった理由を説明するのは難しいのですが、もっとも簡単な理由は、環境保護はほとんどのアメリカ市民の関心事であり、学校がそう



した科目を教えることを父母が望むということです。他の理由は、公立学校が自分のカリキュラムを決定するにあたり、国の決めた厳格な基準に従うのではなく、より大きな自由があるということではないでしょうか。そこで、学校は、環境教育科目のような父母や生徒に人気のある独自の科目を設けることができるのです。大学には環境保護を専攻する多数の学生がいますが、それは環境保護に向けた多数の職業があるからです。合衆国では小さな会社でさえ、普通は環境問題担当の社員がおり、政府には、環境関連の部門で働く何万という職員がいます。

環境教育が、将来、日本の公教育制度の中にしっかりと組み込まれることを期待します。私は、環境への関心は普通は子供の頃にはじまり、もしも子供が環境に関心をもつことを教育されるなら、社会全体が次第に子供の考えに同調するだろうと思います。北海道自然保護協会のような団体が、環境問題について若者を教育する役割を果たすことを期待します。



(ユタ州ローガン近郊の歩道橋を建築中のマーク)

コメント

マーク君は、アメリカの環境法と日本の環境法の両方に通じた環境弁護士になりたいという希望をもっており、最近、西部の有名な大学の法律大学院に合格しました（アメリカでは、弁護士になるためには、法律大学院を卒業して、州の弁護士試験に合格しなければならない）。

マーク君の本文にも出てきますが、アメリカでは小学校の頃から自然保護を中心とした環境教育を熱心に行います。民間の経営する野外学校も多数あり、夏休みには多数の子供達がキャンプや体験旅行に参加します。また、多数の自然保護団体があり、子供達は、小さい時から環境団体のボランティア活動に参加したり、いくつかの団体に加入して会費を支払ったりします。こうした教育や体験を通して、子供達は自然の大切さ、怖さ、すばらしさを身体で学ぶのです。

また、有権者から政治家への手紙作戦などもよく行われます。政治家も地元の人の目を気にして環境保護に取り組みます。環境など票にはならないといわれる日本とは大きな違いといえます。

マーク君は、アメリカで最も国立公園の多いユタ州の大学の環境学部を卒業しました。アメリカには、ほとんどの大学に環境学部や環境学科があり、卒業すると環境学士の称号がもらえます。日本には、こうした学部・学科はわずかしかありません。学生のボランティアも盛んで、マーク君は地球資源クラブ、自然資源学生協議会、野生生物協会などに参加し、地球資源クラブでは事務局長と会長をしていました。こうした体験が、入学試験の時には高く評価されます。この点も学力試験一本で選考する日本の大学とは大きく異なるところです。

マーク君は、日本で最も自然に恵まれた北海道を留学先を選びました。ハイキング、スキー、旅行が大好きで一人でも多くの人に会いたいという希望を持っています。皆さんも声をかけてください。なお、マーク君は日本語がたいへん上手です。

(編集委員 高山武道記)

1998年自然保護学校に参加して

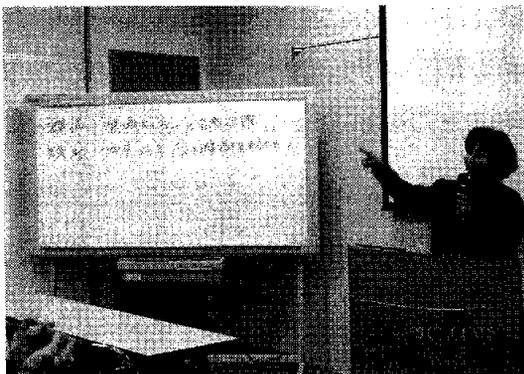
昼の部

明野宣子

札幌駅に着くと雪が降っていた。自然保護学校の開校日(11月12日)にピッタリの空模様だ。気候はどんなに文明が発達しても変えられない自然のメカニズムだと誰もがズーと信じた。しかし、20世紀の末になって、地球上のあちこちでおかしくなっていた。地球温暖化で近い将来国土がなくなってしまう国さえあるらしい。

講義に先だって依浩三会長から挨拶、今日は濃紺の背広にビシッと決めて登場。続いて自然保護学校の校長、鮫島惇一郎講師が登場して授業開始。気候と森林の関係、サケの話、移入動物アライマの現状、環境ホルモンと自然保護、自然を守るために等5日間内容豊富な授業でした。久しぶりに学生に戻ったような緊張感のある一時。よくを言えば30分位の質疑応答の時間があればいいと思いました。講義の内容で今一つ理解しづらい事、日頃疑問に感じている事などが聞けたらいいし、そのうえ参加した人達ともっとコミュニケーションできたらと思いました。

環境ホルモンという化学物質をほおっておくと“種の絶滅”という恐ろしい時代、恐ろしい状況の中に生きている我々がどう生き延びるかは我々の考え次第である。そのために学習と行動に参加したいと思いました。(千歳市在住)



第5回夏休み 自然観察記録コンクール入賞者

金賞

伊藤 結美(恵庭市立若草小学校3年)
こけの研究

銀賞

刀瀬 浩一(根室市立花咲小学校4年)
明治公園で見つけた生きもの
藤川 朋子(旭川市立啓明小学校2年)
アリのかんさつ

銅賞

坂 尚憲(札幌市立緑丘小学校5年)
カタツムリの観察
寺島 千博(苫小牧市立泉野小学校5年)
金魚がたまごを生んだよ
佐藤 愛美(栗山町立栗山小学校4年)
かたつむり
刀瀬 春洋(根室市立花咲小学校3年)
トリオプスの飼育
高木 宏徳(札幌市立月寒小学校2年)
秋の虫たちつかまえた
荒谷 有紗(札幌市立苗穂小学校1年)
あおむしのかんさつ

佳作

寺島 弥子(苫小牧市立泉野小学校6年)
牛の胃は4つもあるの?
西川 直輝(由仁町立三川小学校6年)
コロギの成長と羽化
本間雄二期(札幌市立平岡公園小学校6年)
雲の観察
西條 悠(美瑛町立依真布小学校5年)
カイちゃんの成長日記
長沢 公一(紋別市立沼ノ上小学校5年)
牛の出産
岩瀬 拓馬(札幌市立大平小学校4年)
けんぴきょうでのぞいて見たら
小林 梢(栗山町立栗山小学校4年)
かたつむりの本
中村 亮社(函館市立金堀小学校4年)
けんぴ鏡での観察
牧野 汐美(札幌市立大平小学校4年)
おじぎょうのかんさつ
稲葉 貴子(函館市立柏野小学校3年)
ナミアゲハのかんさつ
神田 聖也(札幌市立栄町小学校3年)
毛ガニ
吉岡 容香(札幌市立宮の森小学校3年)
スズ虫の観察
木谷空見子(土幌町立土幌小学校2年)
十かち三またの花と虫
千代 武志(旭川市立永山南小学校2年)
アゲハちょうのかんさつ
西田 智紀(稚内市立稚内中央小学校2年)
雑草の観察
磯谷 巧(北広島市立大曲小学校1年)
みんないきている夏休みのいきもの
柴田 泰行(音別町立音別小学校1年)
はくのおんべつ川
戸田 大基(函館市立北美原小学校1年)
あおむしのかんさつ
中島 貴洋(中富良野町立中富良野小学校1年)
あさがおのかんさつにつき
森 才華(教育大附属釧路小学校1年)
おたまじゃくしからかえる やごからとんぼ

学校賞

栗山町立
栗山小学校
札幌市立
大平小学校
紋別市立
沼ノ上小学校

平岡公園の一角にウエットな環境を生かした公園整備が市民参加という形で進められています。「利用」が前提の公園整備と自然を生かしながらのエリアづくりには矛盾するものがあり、私たちは悩みながら係わっています。しかし、親子が中心の仲間たちはとても元気で原っぱや小川で楽しんでいます。

この夏、公園に隣接する「たくぎんの森」(通称)の所有権がジャスコに移り、国内最大級のショッピングセンターが計画されていることがわかりました。計画が実施されると平岡公園の湿地への影響が大変心配されます。この敷地の半分は池や森が残り、野幌から、引っ越してきたアオサギのコロニーもあります。「森を守ってください」とジャスコにお願いする署名を草の根運動で始めたところ、2ヶ月で4500もの声寄せられました。池や森林部分はどうか今回の計画地から外れ残るようです。しかし、10ha以上の広さに建物と駐車場が建設されると、地下水への影響は明らかです。すぐ下に貴重な平岡公園の湿地があるのに何ら配慮されません。私たちは開発許可を出す札幌市の各部局に湿地への影響を訴えています。むなしいばかりの手応えです。4月には札幌市もアセスに取り組むようですが、総面積30haの今回の開発は適応されません。市民参加だ、パートナーシップだ、と掛け声はあるものの、市民の声が政策決定まで届かないのでは何の意味もありません。

私たちは、子供たちが生き物と出会える貴重な身近な自然を失いたくありません。

(札幌市在住)

北海道
各地の

今年こそ突哨山の公有地化を実現させよう

—— 出羽 寛 (突哨山の自然を考える会)

日本でも有数のカタクリ群生地として知られる突哨山(旭川)のことはもうご存じかと思います。市民有志41人が呼びかけ人になり、突哨山を旭川市が買い取り、公有地化することを求める署名活動を始めて9ヶ月になります。昨年、この会報(NC・103号)でも現状をお知らせし、多数の方から署名を送っていただきました。その後の経過をお知らせします。

昨年春から始まった署名活動は順調に進み、8月末には予定どおり2万名を超えました。この間、多くの市民、団体、企業の方から協力をいただきました。毎月2回の街頭署名を行ったある有志は「予想に反して若者の反応が一番良く、茶髪のおにいちゃんから頑張ってくださいと励まされて感激した」と年末の忘年会で話していました。

9月始めに旭川市長、市議会議長へ第1回目の提出を行いました。議長さんは「私も気持ちは皆さんと同じです」、助役さんは「買い取るとしたら、どのような方法が可能か、担当者に研究させている」と、心強い返答をいただきました。

今年1月現在、署名は3万3千名集まり、最終目標の3万6千名までもう一歩です。旭川市長さんは元旦のインタビュー記事(地元紙 あさひかわ新聞)で「突哨山のことはいつも気に留めている。土地購入に寄付をしてくれれば、議会や市民の理解を得やすくなるとも考えている」と話しています。寄付には有志の中でも意見が分かれ、どうするか今検討中ですが、いずれにしろ公有地化の実現までもう一歩のところまで来ています。

そのためにも、早急に3万6千名という最終目標を達成し、旭川市へ提出したいと思います。再度皆様のご協力をお願いしたいと思います。連絡下されば、署名用紙をすぐ郵送させていただきます。雪解け後にはまた全道から大勢の人が早春の野の花と雑木林を楽しみに突哨山にやってきます。今年こそ、突哨山の公有地化を実現させたいと思っています。

(旭川市在住)

根室道路のアセスメント

大館 和広
(理事)

この道路は自動車専用道路（いわゆる高規格道路）として将来的には釧路と根室を結ぶ。今回は根室市内の7kmについて工事着工の為にアセスが行われ、昨年10月にアセス書の縦覧と地元の説明会が行われた。私が一部入手したアセス書はとても満足のものではなく、特に鳥類の調査における疑問点が多く、開発建設部が結論付けしている「環境保全水準を満足する」などと言う結論を導き出せるものではなかった。説明会では地元自然保護関係者の質問に対して、開発建設部は満足な回答が出来なかったという。

この道路建設に関しては色々な問題があると思う。ひとつはこのアセスが環境影響評価法による法アセスではなく、閣議アセスであるという点だ。閣議アセスでは住民参加の場は説明会と意見書の提出しがなく（必要に応じて公聴会）、形どおりの既成事実を積み上げれば、アセスがどんなものであっても工事の着工は可能である。

今回この区間の着工を既成事実として、これから先釧路までの間に存在している北海道を象徴するような特殊で貴重な自然環境や野生動植物に多大な悪影響がでようとも、どんな理由をつけてでも全線完成を目指していくのだろうと思う。

事実今回のアセスでは、この道路を建設していく上で避けて通れない筈の温根沿の架橋の問題も、それに伴っておきる周辺の自然環境に与える影響についても、何一つ触れられていない。道路は短区間で機能しないはずであり、そうであれば工事に伴うアセスもまた工事全線を見据えたものであるべきだと思う。

工事の為のアセスではなく、自然環境のためのアセスが実施される時がくるのだろうか。今年から実施される法アセスが、そうなってくれることを望みたい。

(紋別市在住)

北海道 ニュース

今時うれしい新種発見

福地 郁子
(編集委員)

当協会の会報、会誌、読本などの写真提供にいつもご協力いただいている、植物写真家の梅沢俊さんが2年前に見つけたアザミが新種であることが最近分かった。新聞のコラムでも、特に景気の低迷している北海道において、新種発見は明るい話題と評していた。

昨年12月25日の複数の新聞報道によれば、1996年8月、梅沢さんは撮影取材で訪れていた、利尻島南部の海岸近くの林に点在していたアザミが、道内で普通に目にするチシマアザミと違い、濃いピンクの筒状花がうわむきに咲いていることに注目した。写真におさめ、国立科学博物館植物研究部の門田裕一主任研究官（アザミが専門）に同定を依頼した。その翌年門田研究官と現地調査を行い、近以種や染色対数を調べ、利尻島固有の新種と確認した。発見地にちなみリシリアザミと命名、学名は発見者の名前が入りキルシウム・ウメザワヌム（*Cirsium umezawanum*）とされ、国立科学博物館発行の学術誌「国立科学博物館研究報告」（1998年12月22日発行）で報告された。

丁寧な観察と取材で素晴らしい植物写真を発表される梅沢さんならではの「新種発見」であろう。北海道には、まだ未調査部分が残っている。ウメザワヌムがさらに増えることを期待したい。

(札幌市在住)

ヨーロッパの風穴植生を観て（その2）

当協会副会長 佐藤 謙

イタリアへは、7月中旬、フィレンツェに初めて滞在した際、「2度と来ないぞ」と思ってしまいました。それは、連日38度を超す猛暑に「やはり寒い方」と思い知らされ、また、相当の金持ちにみえたらしく、白昼堂々、公衆の面前、中央駅前とバスの中で二度も少女カツアゲ集団にアタックされたからでした。猛暑の上、変な緊張感を強いられた旅だったのです。

ところが、その後、10月と11月に「2度も」イタリアへ旅をしてしまいました。共にアルプス山脈の南麓（前山）にある風穴地を観るためです。10月は、南チロル・ボルザーノ（ボーゼン）に近いエッパン風穴地を目指しました。研究所の学生から「イタリアは北部ほど、観光地でないほど安全。ましてドイツ語圏となる南チロルは特に大丈夫！」と変な励ましを受け、恐る恐る出発した旅でした。しかし、実際には素朴な人々の親切があり、のどかな旅を楽しむことができました。そのため、11月にはまた別の風穴地に、余計な心配をせずに出かけることができました。ここでは、そのうち10月7～8日に観ることができたエッパン風穴地について紹介しましょう。

この旅は、まずスイス・チューリッヒからイタリア・ミラノに向かってまっすぐに南下、アルプスを横断します。特急で約3時間半の旅、国際列車ですから安心感があり、また英語が通じます。次は、ミラノからベニス行きに乗り換え、ポー平原の田園地帯を北東へ進みます。急行列車ですが相当に遅れ、何時どこに着くか不安になってきました。しかもイタリア語の車内放送はチンプンカンプンです。地図を広げて駅ごとに確認していると、前の席にいた中年夫婦がとても親切で、とくにオカアちゃんの方がストップするたび駅名を丁寧に発音して教えてくれます。まわりに「そうだ」という微笑みがあります。このような親切に囲まれて観た広大なポー平原は、自然の森林は失われ、全てトーモロコシ、インゲンなどの畑や家畜用草地に替えられており、ニセアカシア（中国からの帰化種）の木立やポプラ類の防風林が目立っております。このようにして約2時間半、ベローナに到着しました。

ベローナで再度乗り換え、アルプ스에囲まれたボルザーノに北上します。前山地域に入ると、家畜用草地とともに、平坦面（U字谷）のリング園や斜面のブドウ畑が目立つようになり、セイヨウグリ（*Castanea sativa*）やナラ類（*Quercus petraea*）が主となる落葉広葉樹林が優勢になってきます。この森林は、度重なる伐採によって樹高が低くなった二次林ですが、アルプス山脈南麓では標高約800メートル以下（山地帯）の森林植生を代表するものです。エッパン風穴地（標高約650メートル）は、基本的に、この山地帯に位置します。

エッパン風穴地については諸文献に引用されている複数の論文がありますが、当時、直接には一つも手に入れておりませんでした。全て孫引きの間接情報だけで出かけてしまったのです。10月7日、ボルザーノに到着した夜、街最大の本屋を教えてもらい、この風穴地について尋ねたところ、幸いにもその本屋（アテシア）発行の詳細な「エッパン解説書」を手に入れることができ、真に心強い気持ちになりました。

翌8日はあいにくの強雨、真っ暗な天候でしたが、風穴地を充分確認することができました。風穴地周辺の森林は、既述の2種に加えてヨーロッパナ、セイヨウハシバミ、ヨーロッパアカマツなどから構成されております。風穴地になると突然、亜高山性のヨーロッパトウヒの小団林となります。そして風穴地中心部にはイワダレゴケ、コスギラン、スギカズラ、コケモモ、コガネギク（母種）、コメススキ、ヒメマイヅルソウなど北海道との共通種のほか、本州高山にもあるミヤマソモソモ (*Poa alpina*)、ミヤマハンショウヅルの近縁種 (*Clematis alpina*)、キク科 (*Homogyne alpina*)、キキョウ類 (*Campanula scheuchzeri*)、シャクナゲ類 (*Rhododendron ferrugineum*)、ツツジ類 (*Calluna vulgaris* や *Erica herbacea*) など、この夏アルプス高山帯で馴染みになった多くの高山植物を確認することができました。

この風穴地は、ガントベルグと呼ばれる流紋岩からなる岩峰（標高934メートル）の北東斜面下部、山崩れ地として直径1～3メートルの巨礫が堆積した斜面の下部にあります。斜面上方には岩塊露出地が拡がり、斜面下部だけが植被（風穴植生）に被われております。特に、斜面末端部が直径20メートルほどの凹地形になった場所では、凹地の底部に吹き出した冷気が貯まるようになっており、特に高山植物が集中して観られます。実際に地温を測定してみましたが、当日の強雨のせい、季節的に対流が止んでしまったのか、高山植物生育地でも8.8～9.9度、残念ながら風穴地内外の気温と同じ値でした。

文献によりますと、この凹地の中の高低差約5メートルの間で顕著な気温変化（低部ほど低くなる気温の逆転）があり、その短距離の変化に応じて、下方から高山帯、亜高山帯、そして山地帯の植物群落がそれぞれ認められると解説されております。ここは、夏季まで岩塊間に氷が認められることから「エッパン氷穴地 (Eis-loeher)」として有名であり、イタリアの「ピオトープ保護区」に指定されております。雨にもかかわらず多くの観察者がおりましたが、歩道以外は鉄柵で入り込めないように保護され、歩道際には「岩塊間を対流した空気が斜面下部で冷気として吹き出すこと」などを図示した、正確な解説看板が1枚だけ立てられておりました。風穴地における地形的特徴と対流説を確認した旅でした。スイス便り「第2報」として。



シカとワシの鉛中毒

冬になるとオジロワシ、オオワシが越冬のために北海道に飛来してくるが、道東をを中心に1,648羽(98年2月)確認されている。スケトウダラ漁の不振で分散し、その一部が阿寒山系に移動しエゾシカの死体に依存していることがわかった。

近年、雌鹿の解禁など狩猟が拡大されたのにもないワシ類の鉛中毒の発生がふえている。阿寒町9羽、白糠町7羽のほか29例(オジロワシ6、オオワシ23)の発生があり、ワシの死亡原因の約8割を占めている。死体全てが発見される訳ではないので、約百羽は死亡しているとみていいのではなかろうか。

オジロワシは、世界で5,000~7,000^羽、オオワシは、日本とロシアで7,000羽、約1,700^羽といわれている。絶滅の危機に瀕している希少鳥類で、国の天然記念物にも指定されている。

シカ猟との関わりをのべよう。ライフル銃は、貫通せずに体内で散乱し殺傷力を高めるために鉛

弾が使われている。手負いもいれば、シカの死体の一部が現場に捨てられているのも現実である。

鳥は、歯を持っていない分、腺胃(化学的消化)と筋胃(機械的消化)で消化する。鉛を飲み込むと腺胃内で急速に溶け、胃は弛緩しペリットとして吐きもどせず、小石と同様に筋胃内に落ち着く。哺乳類は、歯があり化学的消化はゆっくりで急性中毒は少ない。また、筋肉内の鉛(散)弾は、ほとんど吸収されないので中毒は大丈夫とか。

鉛弾を銅弾に変更し、死体を全て持ち帰れば簡単に解決するのだが。発生が続く水鳥の鉛中毒は、鉛散弾によるもので、先進国では禁止されているが、日本では程遠い話だ。ましてや、「シカを60,000頭に半減」という計画が見直されない限り、死体の放置は続くだろう。ハンターのモラルだけに頼っていては、さらに、ワシの死亡がつづき、国際的批判はさらに大きくなるのでは。なお、シカの死体は、そのほかの猛禽類やクマ、キツネの餌になっていることも付け加えておこう。

(獣医師・中標津町在住)

ナキウサギ裁判第11回公判

記録 江部 靖雄(理事)

第11回口頭弁論が11月26日傍聴者30名の参加で開かれました。4月に裁判長交代以降初めて被告(道)から裁判前日の25日に準備書面の提出がありました。私達が再々にわたり要求していた口頭での説明は実現しませんでした。市川弁護団長が、鹿追町側トンネル出入口予定地の法面をナキウサギの「徘徊・採食地」と記述している点について「採食地は生息地として理解してよいのか」と被告に質問。被告は回答に窮して保留する一幕もありました。また87年以降の道路建設に係わる各種調査資料の提出要求に対して被告側は「出せるものは出す」と答弁しましたが、八木原告団長は、先のラウンドテーブルの際に時のアセスの進行状況経過報告をその都度報告(提出)すると約束しているのに一切提出しないのは何故かと質問、

被告側は「時のアセスは3月末までかかる」と回答。裁判長は被告に対して明らかにできるのは報告するように促しました。

他に菅野庄一原告代理人弁護士(東京弁護士会所属)が全国公共事業の現況と問題点について、事業自体の必要性、情報公開、市民参加、評価システムの制度化、自然環境に与える危険性等々を指摘し、最後に98年9月札幌で開かれた日弁連人権大会での大会決議全文を読みあげ意見陳述をしめくりました。

次回公判は2月4日(木) 13時10分~13時30分札幌地裁8階5号法廷にて開かれます。

道側準備書面への反証および提出した立証計画書の審議がされる予定です。引き続き多くの傍聴者の出席を期待します。

活動日誌

1998年10月

- 5日 北方四島シンポ実行委員会
- 7日 会誌編集会議
- 16日 拡大常務理事会
- 24日 エゾシカ・シンポジウム
札幌市女性センター 参加者60名
- 30日 日弁連「エゾシカ問題」ヒアリング対応

1998年11月

- 11日 自然保護学校「夜の部」開校
参加者30名
- 12日 自然保護学校「昼の部」開校
参加者29名
- 14日 自然観察会（ウトナイ湖）参加者16名
- 20日 拡大常務理事会
- 26日 ナキウサギ裁判

1998年12月

- 10日 自然保護学校「昼の部」閉校
- 16日 自然保護学校「夜の部」閉校
- 19日 理事会

要望書など

- 1998年10月20日 函館開発建設部長宛
見市川沿い国道277号復旧工事に関する要望書
- 1998年10月20日 森営林署長、森町長宛
森町鳥崎川流域の公有林野等官行造林地の伐採
に関し環境保全上の留意を求める要望書
- 1998年12月9日 北海道知事宛
「時のアセス」による土幌高原道路計画の再評
価の進め方に関する要望書

寄 贈

北海道森を知る

森林総合研究所北海道支場
みんなで見直そう公共事業

札幌弁護士会

お知らせ

第2回高山植物盗掘防止のための 全道シンポジウム

主催 北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会
日 時：99年2月28日（日）10時～16時
会 場：かでの2・7ホール
（札幌市中央区北2西7）
参加費：1,000円（資料代含む）

内 容

午前の部 10：00～12：10

基調講演

「高山植物は自然の成り立ちを伝える宝物」
文化庁 池田 啓

緊急報告「北海道の盗掘レポート」

ネットワーク委員会調査チーム

午後の部 13：00～16：00

パネルディスカッション

「盗掘防止の取組を拓げるために」

スライド&トーク「いたずら好きな神様」

植物写真家 梅沢 俊

まとめ・アピール

参加申込&お問い合わせ

北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会事務局
〒060-0807 札幌市北区北7西5ストークms704
自然ウォッチングセンター内
電話/FAX011-736-3165まで。

参加申込みは、①所属の団体名または住所、②ご
氏名、③電話番号を明記の上、葉書またはFAXで。

新 会 員 紹 介

98年9月20日から12月19日迄

【A会員】加藤 正和 清水 義明 吉田 信夫
【学生会員】藤田 暢明

寄 付 金

藤 川 正 子 1,000円

*** お知らせコーナー ***

冬芽と野鳥観察

環境庁の「ふるさと生きものの里」にも指定されている西岡公園にパークゴルフ場計画があります。冬芽や野鳥の観察と合わせて開発計画の問題点など話しあって行きたいと思います。

日時：1999年2月27日（土）

場所：10時 西岡水源地事務所前集合

12時00分散

防寒着、図鑑、双眼鏡が必要です。

『獣医さんのお話シリーズ』の森田先生がテレビ出演いたします。是非ごらんください。

NHK教育テレビ・高学年環境教育番組（15分）

「たったひとつの地球～野生動物のお医者さん」

レポーター・清水國明（タレント）

放送予定

2月1日・8日（月） 11：45から

3日・10日（水） 11：30から

4日（木） 10：45から

士幌高原道路と21世紀の国立公園

講演とフォーラムの夕べ

主催：十勝自然保護協会・北海道自然保護協会・北海道自然保護連合

日時：2月20日（土）午後6時30分～9時00分
（6時開場）

会場：帯広とちかプラザ視聴覚室（2F）

参加：無料

内容

第1部

「大雪山の魅力と稼ぎ方」

講師 梅沢 俊（植物写真家）

第2部 フォーラム

「士幌高原道路と21世紀の国立公園を考える」

以上のお問い合わせ・申し込みは

(社)北海道自然保護協会

札幌市中央区北3条1丁目加森ビル5・6F

TEL・FAX (011)251-5465まで

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員 4,000円

個人B会員 2,000円

（A会員と同一世帯の会員）

学生会員 2,000円

団体会員 1口 15,000円

〔会費納入方法〕

郵便振替口座 02710-7-4055

北海道銀行本店（普通） 101444

札幌銀行本店（普通） 418891

事務局ニュース

新年明けまして、おめでとうございます。昨年は、会員皆様のお力添えによりまして、2回目の自然保護学校、日本自然保護協会とタイアップして実施した、自然観察指導員の養成、小学生を対象とした夏休み自然観察記録コンクールも5回を数えるなど、幾つかのシンポジウムの開催とともに、大きな足跡を残した1年でした。今年も、愈々士幌高原道路問題や、千歳川放水路問題も大きな山場を向え、数多くの身近な自然の保全など、正に正念場の年であります。事務局としても、今年には自然環境が、三重苦（九）（1999年）の年ではなく、良い年（平成11年）であるように願うと共に大いに頑張りたいと思っております。（山辺）

※ この紙は再生紙を使用しています。

